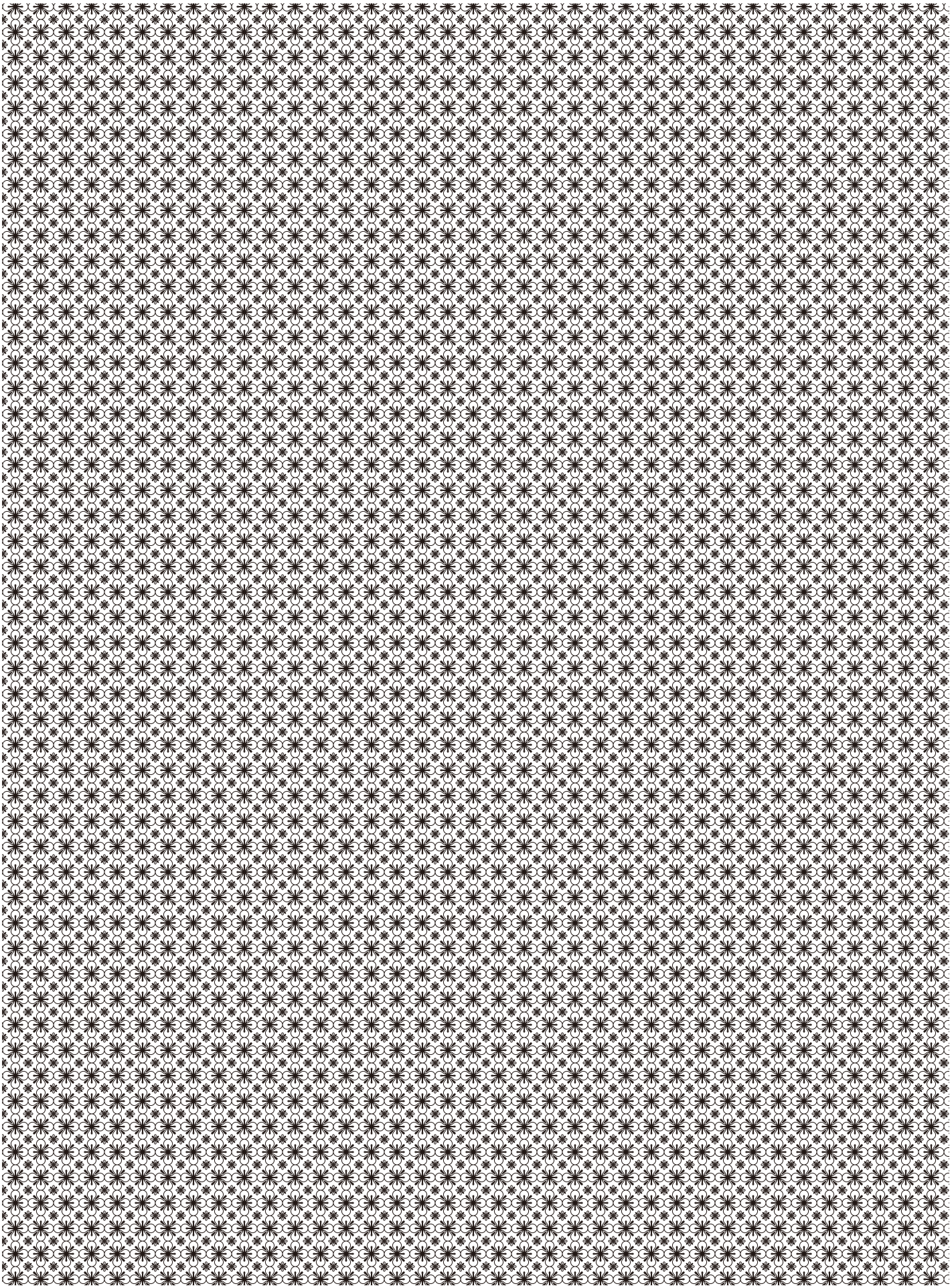
国　　語



〔問　1〕例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】非常に恣意的である。

1　無駄を省いて能率よく物事を行うさま
2　他との関係や比較のうえに成り立つさま
3　特定の立場にとらわれずに物事を捉えるさま
4　勝手気ままで論理的な必然性がないさま
5　個々の事物に即しているさま

〔問　2〕例文の（　　）に当てはまる「四字熟語」として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】〝考えや行動が自由であること〟を、（　　）と言う。

1　魑魅魍魎
2　風光明媚
3　融通無碍
4　豪放磊落
5　渾然一体

〔問　3〕例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】老成した話し方の人だ。

1　年のわりに落ち着いた
2　静かでゆっくりとした
3　重々しく低音の響いた
4　知性的で筋道の通った
5　渋みがありしわがれた

〔問　4〕例文の（　　）に当てはまる「故事成語」として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】〝目上の人がある人を信任して手厚く迎えること〟を、（　　）と言う。

1　水魚の交わり
2　烏合の衆
3　牛耳を執る
4　三顧の礼
5　座右の銘

〔問　5〕例文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】大は小をカねる。

1　私は、チームの勝利にコウケンした。
2　辞書は弟とケンヨウで使っている。
3　足首を痛めてしまい、キケンする。
4　日本国ケンポウを学ぶことにした。
5　暴風雨のケンナイに入っている。

〔問　題〕次の文章を読み、後の〔問　6〕～〔問　10〕に答えなさい。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか――酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果した※1肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその（　A　）だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。※2蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行っても、最初の二三小節で不意に立ち上がってしまいたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

なぜだかその頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転してあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、といったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並みが傾きかかっていたり――勢いのいいのは植物だけで、時とすると吃驚させるような向日葵があったり※3カンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から※4何百里も離れた仙台とか長崎とか――そのような市へ今自分が来ているのだ――という錯覚を起こそうと努める。私は、出来ることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行ってしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な布団。匂いのいい※5蚊帳と糊のよくきいた浴衣。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。希わくはここがいつの間にかその市になっているのだったら。――錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の（　B　）と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火という奴が好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、様々の縞模様を持った花火の束、※6中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火というのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆った。

それからまた、※7びいどろという色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになったし、※8南京玉が好きになった。またそれを嘗めてみるのが私にとって何ともいえない享楽だったのだ。あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落魄れた私に蘇ってくる故だろうか、全くあの味には幽かな爽やかな何となく詩美といったような味覚が漂って来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とはいえそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅沢ということが必要であった。※9二銭や三銭のもの――といって贅沢なもの。美しいもの――といって無気力な私の触角にむしろ媚びて来るもの。――そういったものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、例えば※10丸善であった。赤や黄の※11オードコロンや※12オードキニン。洒落た※13切子細工や典雅な※14ロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壜。※15煙管、小刀、石鹸、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費やすことがあった。そして結局一等いい鉛筆を一本買うくらいの贅沢をするのだった。しかしここももうその頃の私にとっては重くるしい場所に過ぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝――その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下宿を転々として暮していたのだが――友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぽつねんと一人取り残された。私はまたそこから彷徨い出なければならなかった。何かが私を追いたてる。そして街から街へ、先に云ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち止まったり、乾物屋の乾蝦や※16棒鱈や※17湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、そこの果物屋で足を留めた。ここでちょっとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の※18快速調の流れが、見る人を石に化したという※19ゴルゴンの鬼面――的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんな※20ヴォリウムに凝り固まったというふうに果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高く積まれている。――実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか※21慈姑だとか。

またそこの家の美しいのは夜だった。寺町通は一体に賑かな通りで――といって感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが――飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうした訳かその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街角になっているので、暗いのは当然であったが、その隣家が寺町通にある家にもかかわらず暗かったのが瞭然しない。しかしその家が暗くなかったら、あんなにも私を誘惑するには至らなかったと思う。もう一つはその家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠った帽子の廂のように――これは形容というよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げているぞ」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のように浴せかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、肆にも美しい眺めが照し出されているのだ。裸の電灯が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んで来る往来に立って、また近所にある※22鎰屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中では稀だった。

その日私はいつになくその店で買物をした。というのはその店には珍らしい檸檬が出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのも見すぼらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかったので、それまであまり見かけたことはなかった。一体私はあの檸檬が好きだ。※23レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰った紡錘形の恰好も。――結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んで来たとみえて、私は街の上で非常に幸福であった。あんなに執拗かった憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる――あるいは不審なことが、逆説的な本当であった。それにしても心という奴は何という不可思議な奴だろう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった。その頃私は肺尖を悪くしていていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かった。その熱い故だったのだろう、握っている掌から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった。

私は何度も何度もその果実を鼻に持っていっては嗅いでみた。それの産地だというカリフォルニヤが想像に上って来る。漢文で習った※24「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉が断れぎれに浮かんで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸込めば、ついぞ胸一杯に呼吸したことのなかった私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇って来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと云いたくなったほど私にしっくりしたなんて私は

（　C　）に思える――それがあの頃のことなんだから。

私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持ちさえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思い浮かべては歩いていた。汚れた手拭の上へ載せてみたり※25マントの上へあてがってみたりして色の反映を量ったり、またこんなことを思ったり、

――つまりはこの重さなんだな。――

その重さこそ常づね私が尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、Ⅰ思いあがった諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えてみたり――何がさて私は（　D　）だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。Ⅱ平常あんなに避けていた丸善がその時の私には易やすと入れるように思えた。

「今日は一つ入ってみてやろう」そして私はずかずか入っていった。

しかしどうしたことだろう、私の心を充していた幸福な感情はだんだん逃げて行った。香水の壜にも煙管にも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！　と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐってゆく気持ちはさらに湧いて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなってそこへ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえ出来ない。私は幾度もそれを繰返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだった※26アングルの橙色の重い本までなお一層の堪え難さのために置いてしまった。――なんという呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になってしまって、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に目を晒し終わって後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持ちを、私は以前には好んで味わっていたものであった。……

「あ、そうだそうだ」その時私は※27袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰って来た。私は手当たりしだいに積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取去ったりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなったり青くなったりした。

やっとそれは出来上った。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、Ⅲその檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こった。その奇妙なたくらみはむしろ私をぎょっとさせた。

――それをそのままにしておいて私は、何喰わぬ顔をして外へ出る。――

Ⅳ私は変にくすぐったい気持ちがした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行った。

変にくすぐったい気持ちが街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛て来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みじんだろう」
そして私は※28活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下っていった。

（本文は『梶井基次郎　ちくま日本文学０２８』による。ただし、ふりがな等、原文の一部を変更した箇所がある）

※1　肺尖カタル…肺尖（肺の上部の尖端部分）の炎症。肺結核の初期症状。
※2　蓄音器…レコードから音を再生する装置。レコード・プレーヤー。
※3　カンナ…カンナ科の園芸植物。夏から秋にかけて、赤、黄、白などの花が咲く。
※4　何百里…一里は、約三・九キロメートル。
※5　蚊帳…蚊を防ぐため寝室につり下げた網の覆い。
※6　中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき…いずれも花火の種類の名。
※7　びいどろ…vidro（ポルトガル語）ガラスのこと。
※8　南京玉…穴のあいた陶製、ガラス製の小さな玉。糸を通して飾りに用いる。
※9　二銭…一銭は、一円の百分の一の単位。
※10　丸善…商店名。洋書や輸入雑貨の専門店。
※11　オードコロン…eau de Cologne（フランス語）香水の一種。オーデコロン。
※12　オードキニン…eau de Quinine（フランス語）液状の養毛剤の一種。
※13　切子細工…切り込み細工をしたガラス器。カットグラス。
※14　ロココ…Rococo（フランス語）十八世紀、フランスのルイ十五世時代に流行した装飾様式。
※15　煙管…khsier（カンボジア語）刻みたばこを詰めて火をつけ、煙を吸う用具。
※16　棒鱈…真鱈の身を乾燥させた食品。
※17　湯葉…豆乳の皮膜を乾燥させた食品。
※18　快速調…allegro（イタリア語）音楽用語。アレグロ。
※19　ゴルゴン…ここでは、ギリシャ神話に登場する三人姉妹の怪物ゴルゴン（Gorgon）の末の妹メドゥーサのこと。
※20　ヴォリウム…volume 量感。ボリューム。
※21　慈姑…オモダカ科の水生多年草。球茎を食用にする。
※22　鎰屋…商店名。一階が菓子店、二階が喫茶店になっていた。
※23　レモンエロウ…lemon yellow レモンイエロー。
※24　「売柑者之言」…明代初めの劉基〔一三一一―一三七五〕の文章。「鼻を撲つ」は、文中に「剖之如有烟撲口鼻」〝之を剖けば烟有りて口鼻を撲つが如し〟（書き下し文）とあるのによる。ここでは、檸檬の臭いが鼻を刺激したことを漢文になぞらえて表現している。

※25　マント…manteau（フランス語）ここでは、旧制高校の学生が着ていた黒いマントのこと。
※26　アングル…Jean Auguste Dominique Ingres フランスの画家。〔一七八〇―一八六七〕
※27　袂…和服の袖の下の袋のようになっている部分。
※28　活動写真…映画の旧称。

〔問　6〕空欄A・B・C・Dに入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　A　借金　　B　想像　　C　幸運　　D　熱心
2　A　不吉な塊　　B　錯覚　　C　不思議　　D　幸福
3　A　神経衰弱　　B　妄想　　C　不自然　　D　明朗
4　A　焦燥　　B　現実　　C　愉快　　D　嫌悪
5　A　宿酔　　B　夢　　C　不快　　D　謙虚

〔問　7〕傍線部Ⅰ「思いあがった諧謔心」とあるが、これはどういうことか。説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　「檸檬」の重さを、善や美の象徴と考えたのは、調子に乗った考えだと自嘲すること。
2　「檸檬」の重さを、善や美の象徴と考えたのは、たいへんいい考えだと談笑すること。
3　「檸檬」の重さを、善や美の象徴と考えたのは、自分が初めてだと逆に誇示すること。
4　「檸檬」の重さを、善や美の象徴と考えたのは、行きすぎだったと悲観的になること。
5　「檸檬」の重さを、善や美の象徴と考えたのは、大げさだったと怒りをあらわにすること。

〔問　8〕傍線部Ⅱ「平常あんなに避けていた丸善がその時の私には易やすと入れるように思えた」とあるが、「丸善」は、避ける以前は「私」にとってどのような場所だったのか。説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　社会人になっていない学生の身で来るのは場違いであるが、明るい未来を想像できる場所。

2　多額の借金を抱えている状態で訪れると、ますます借金のことで悩んでしまうような場所。

3　西洋の香りに浸ることができて、闘病で疲れきった身心をつかの間だけでも癒せる場所。

4　陳列してあるものを見るのに小一時間も費やすような気に入った商品が置いてある場所。

5　勉強もせずに街をぶらぶらしていた頃のことを思い出してしまう、自分自身を省みる場所。

〔問　9〕傍線部Ⅲ「その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた」とあるが、これは「檸檬」のどのような様子を表現したものか。その説明として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　積み重ねた画本をすぐにでも壊してしまいたくなる欲求を、「檸檬」によって封じ込めている様子。

2　積み重ねた画本の中に「檸檬」を放り込むことで、唯一無二の本の城ができあがっている様子。

3　積み重ねた画本の統一感の取れていない色彩のなかで、「檸檬」の単純な色彩が際立って見える様子。

4　積み重ねた画本のゴチャゴチャしたなかに、「檸檬」を置くことで色彩がさらに複雑になっている様子。

5　積み重ねた画本を見て心が躍るような気持ちが湧き起こり、頭の興奮を抑えられなくなっている様子。

〔問　10〕傍線部Ⅳ「私は変にくすぐったい気持ちがした」とあるが、このような気持ちがしたのはなぜか。理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　一度入ると抜け出すことが難しい丸善から、すんなりと街へ逃げ出せたことに安堵（あんど）したから。

2　丸善の持つ雰囲気に違和感を覚え、この後の大胆な行動に対してためらいを覚えたから。

3　自分が見つけた果物と丸善とが、一体化してしまったことによる興奮を覚えたから。

4　人に知られないようにひそかなたくらみをするときの、一種の後ろめたさを覚えたから。

5　この素敵なたくらみは、自分以外の誰も知らないのだという胸の高まりを覚えたから。

〔問　題〕次の文章を読み、後の〔問　11〕～〔問　15〕に答えなさい。

明治神宮がつくられたのには、つぎのようないきさつがある。

明治四十五（一九一二）年七月三十日、明治天皇が崩御された。まだ五十九歳の若さであったが、その在位の間に起きたことは、まさに未曾有の出来事の連続だった。

西欧に開始された資本主義は、地球上にどんどん拡大していって、十九世紀後半には、世界中を一つの「近代世界システム」に呑み込んでしまう勢いを見せていた。アジアの多くの国々は、その過程で西欧諸国の植民地にされていった。ところが日本は、みずから進んで近代世界システムの一員となるという道を選択することによって、植民地化されるのをまぬかれるのに成功した。

明治維新が起こる前から、日本では農業を基礎にした資本主義が、すでに十分な発達をとげていたから、それをもとにして工業資本主義がすぐに成長できた。その結果、日本は植民地化されるどころか、みずからが「帝国」となって、列島の外にまで権益の拡大を求めるにいたった。清やロシアとの戦争にも勝利して、領土は拡大していった。伝統の大国はどこでも、封建主義からのシステム転換がなかなかうまくできずにいた。そのすきに、西欧流の近代世界システムに変身を果たした小国日本が、一躍アジアの「盟主」として躍り出たのである。

しかし、このとき猛烈な勢いで進行した「近代化」は、日本文明を培ってきた東洋の伝統を、根こそぎに破壊する威力をも発揮した。夏目漱石や柳田國男をはじめとする明治の知識人には、この近代化がまことに醜いものであると感じられていた。日本文明は、人間と自然の間につくられる「中間」を重視した。人間の思いどおりに自然を改変してしまうのではなく、自然からの拘束をも受け入れながら、両者の中間に人間の生きる道を求めた。

ところが近代のシステムは、日本文明が大切に育ててきた、その人間と自然の中間の領域というものを壊してしまう。西欧では人間と自然を分けて考える。その上で、人間のほうが「天然自然」よりも偉いと考える。こういう近代的な考えが入ってきて、日本の伝統的な生き方は壊されていった。人間と自然の中間につくられた伝統文化は、洗練された美しさを備えていた。その文化が近代化によって醜く壊されていくのを見て、明治の知識人たちは悲しみ苦しんだ。

近代世界システムを拒絶することは不可能である。そんなことをしたら、日本は早々と滅ぼされてしまっていただろう。それを受け入れるしか他に道はなかった。しかし、世界を醜く変えてしまう近代化によって、伝統を失ってしまえば、自分たちの魂は死んでしまう。近代化と伝統の矛盾を受け入れて、なおかつそれを乗り越えて、新しい「伝統」をみずからの手で生み出せなければならない。

明治時代の最良の精神の持ち主たちは、I こういう大きな矛盾 の中から新しい「伝統」を創出する道を模索していた。その明治の精神を象徴していたのが、ほかならぬ時代のカリスマとしての明治天皇なのだった。

その明治天皇が崩御された。明治天皇は生前から、めったなことでは京都に戻ることもせず、東京で政務に励まれていた。そういう天皇の姿を見ていた※1東京市民は、自分たちが敬慕していた天皇が亡くなられたら、当然その御陵は東京につくられるものとばかり思い込んでいた。

ところが御崩御の直後に※2宮内省から発表されたのは、御陵が京都の伏見桃山に築かれることが、天皇の生前からすでに決まっていた、という驚きの内容であった。ほんとうは自分たちの東京よりも、京都のほうを愛しておられたのか。これには東京市民も、大いにがっかりした。

しかし彼らはすぐに気持ちを切り替えた。ご遺体を納めた御陵は京都でよしとしよう。東京には明治天皇の御霊を奉斎する神社をつくるほう

がよい。下々の者は御陵には近づけないが、神社なら誰でもお参りができる。そのほうがよほど市民に親しまれようというものだし、明治天皇の御霊もよろこばれよう。こうして御霊神社の創設をめざす運動が、市民の間に燎原の火のように燃え上がっていった。

御崩御の直後から、市民たちの間に、明治天皇の遺徳（聖徳）を讃える、なにかの記念物を東京につくるべきだという声が、自然発生的に生まれた。それは裏を返せば、Ⅱ自分たちの生きている時代のアイデンティティの表現物が欲しい、という市民たちの気持ちのあらわれである。その声は、新聞を拡声器にして、たちまち大きな声となって広がっていった。

政治家も心を動かされた。府議会の議員たちは、有力者へのアタックを熱心に始めた。ほどなくして、産業界の雄・渋沢栄一をリーダーとする「明治神宮奉賛会」が結成された。財界と政界を一体とする大プロジェクトが、動き出した。しかしこのプロジェクトは、はじめから「下からの支え」によって動かされていた。明治神宮を創出したのは、市民の力なのである。

「聖徳」の記念物をなににするか、またそれをどこにつくるか、ということで、市民を巻き込んでの議論が沸騰した。西洋ではこのような場合、銅像をつくって記念とするものだ、と主張する開化派もいた。美術館をつくるのもいい、聖徳は可視化しなければ意味はない、というのがこの人たちの考えである。喧々囂々の議論の末、ほどなく決定が出た。つくられるのは森に包まれた神社。代々木と青山の二ヵ所を、内苑と外苑としてつないで、それはつくられる。

森はなにかを隠しながらなにかをあらわす。明治という時代の象徴が、隠しながらあらわす森として表現されることに決まった。驚くべき決定である。

明治天皇を記念する施設は、「森に包まれた神社」となることが決定された。ここにも新しい伝統を創出することを目的とした「明治神宮」というコンセプトの中心に、はじめから森の存在がすえられていたことが、よくしめされている。

じっさい、日本人の生み出した「聖所」のかたちである神社の本質は、建物ではなく、建物を包む森のほうにある。いやむしろ森そのものが神社だった。昔は神社の森は、どこでも今よりもずっと大きかった。鬱蒼たる樹林を抜けて社殿へたどり着いても、そこでは外とも内とも区別のつかない通路のような場所で、人はカミに向かい合う。カミは自然から遮断されていない。

これがキリスト教の聖所では、人は自然から遮断された建物の中で、神と向かい合うようにしつらえられている。建物の天井はとてつもなく高く、ステンドグラスから差し込む光や、天上に向かって上昇していくオルガンや声による音楽が、自然を越えていく神の崇高さを演出する。※3印欧語では古くから神は「デーヴィ」と呼ばれたが、それは天空の高みのことを意味した。神はそこではつねに光や崇高と結びついていた。

ところが神道のカミという考えは、森をとおして表現されたのである。森は薄暗く、遠くを見通すことができない。その森の奥に小さな空き地をつくり、カミを迎える臨時の施設をつくる。そこで神官たちはぼそぼそとカミに呼びかける祝詞を唱え、海山の産物を供物に供え、柏手を打って、カミへの呼びかけとする。崇高さの演出としては、まことに物足りないように見えるが、このやり方こそがカミの概念にはぴったりなのである。

カミは崇高な光の中にいるのではなく、見えるものと見えないものの間を行き来する動きの中にいる。まばゆい光ではなく、カミは陰翳の中に宿る。そういうカミを、自然から遮断されたところに見出すことはできない。こういう考えの中から、神道をかたちづくるさまざまなデザインや聖性の演出はつくりだされてきた。森がつくりだす陰翳の空間は、カミの表現の場所として、まさにうってつけである。

調査会のメンバーは、カミの聖所の本質は建物ではなく森そのものであり、東京につくられる新しい「伝統」の表現場所は、深い森に包まれ

ていなければならないと考えた。彼らはこのときたいへんに重要な思想の行為をおこなっていたと言える。日本人は思想したか。日本人は哲学の言葉によるのではなく、空間の造形をとおして、いつもこのように思想というものを表現してきた。

（中沢新一『アースダイバー　東京の聖地』より）

※1　東京市民…当時は、東京は「都」ではなく「市」であった。「東京市」の範囲は、現在の「東京23区」とほぼ同じ。
※2　宮内省…現在の宮内庁。
※3　印欧語…インドヨーロッパ語族という人間のグループが使う言語。

〔問　11〕日本の自然に対する考え方についての説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　人間と自然とを分けて捉えていて、人間のほうが自然よりも偉いと考えている。

2　自然からの拘束を受け入れながら、人間と自然との共生を求めようと考えている。

3　人間は自然の中の一部分に過ぎないので、自然には手を加えてはいけないと考えている。

4　自分たち人間を、自然界の他の動植物から区別された特別な存在だと考えている。

5　自然は人間の居住する都市の外にあるものとして、管理や支配の対象であると考えている。

〔問12〕傍線部Ⅰ「こういう大きな矛盾」とあるが、ここで言われている「矛盾」とはどういうことか。説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 近代世界システムを拒絶してしまえば日本は滅びてしまうが、受け入れれば、自国の伝統を失い、自分たちの魂は死ぬということ。

2 近代世界経済の変化に順応していけば、工業生産の拡大を進められるかもしれないが、戦争を引き起こしやすくなるということ。

3 小国のほうが近代化政策は成功しやすいが、その後の他国との領土の奪い合いも激しくなり、あっという間に国内が衰弱するということ。

4 明治天皇ならば日本人として近代世界システムを受け入れることに成功するだろうが、そのことで天皇自身が激務となること。

5 近代世界システムを拒絶しなければ植民地化されるのをまぬかれるが、日本が西欧のように精神力を失ってしまうということ。

〔問13〕傍線部Ⅱ「自分たちの生きている時代のアイデンティティの表現物が欲しい」とあるが、それはなぜだと考えられるか。最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 東京市民は、明治天皇を讃える記念物をつくり、江戸から受け継がれた東京を近代世界システムに対抗する日本の伝統の拠点としたいと考えていたから。

2 近代世界システムに染まり、みずから「帝国」となるという過ちを犯した東京市民が、罪を償い、正気を取り戻すことのできる場所を求めていたから。

3 東京市民は、近代世界システムをはねのけて日本の伝統を守りぬいた明治天皇こそが、自分たちの時代を象徴する存在だと考えていたから。

4 明治天皇の御陵が京都に築かれると知って落胆した東京市民は、東京に日本最大の神社をつくることで、日本文化の中心にすることを決めていたから。

5 明治時代、近代世界システムを導入したことにより、日本人の伝統的な文化が壊され、東京市民は自分たちの生き方のよりどころを失っていたから。

〔問　14〕本文では、西洋のキリスト教と日本の神道の伝統の違いについて、随所で述べられている。これらの説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　キリスト教では、天上にいる崇高な神のみを信仰の対象とすることが求められるのに対し、神道では、森の中に住むカミと、自然を越えた聖なる御霊である天皇がともに信仰の対象である。

2　キリスト教では、神は人々から遠く隔たった天上に存在し、司祭がその教えを聞くことはできないのに対し、神道では、神官たちの祝詞によってカミの教えが人々に説かれる。

3　キリスト教では、自然から遮断された教会の建物の中が聖なる場所であるのに対し、神道では、神社は自然と一体で、建物ではなく、それをとりまく森が聖なる場所の中心である。

4　キリスト教では、哲学の言葉によって神の思想を説明しようとするのに対し、神道では、いっさい言葉を用いず、神社という空間を造形することでカミの思想を表現する。

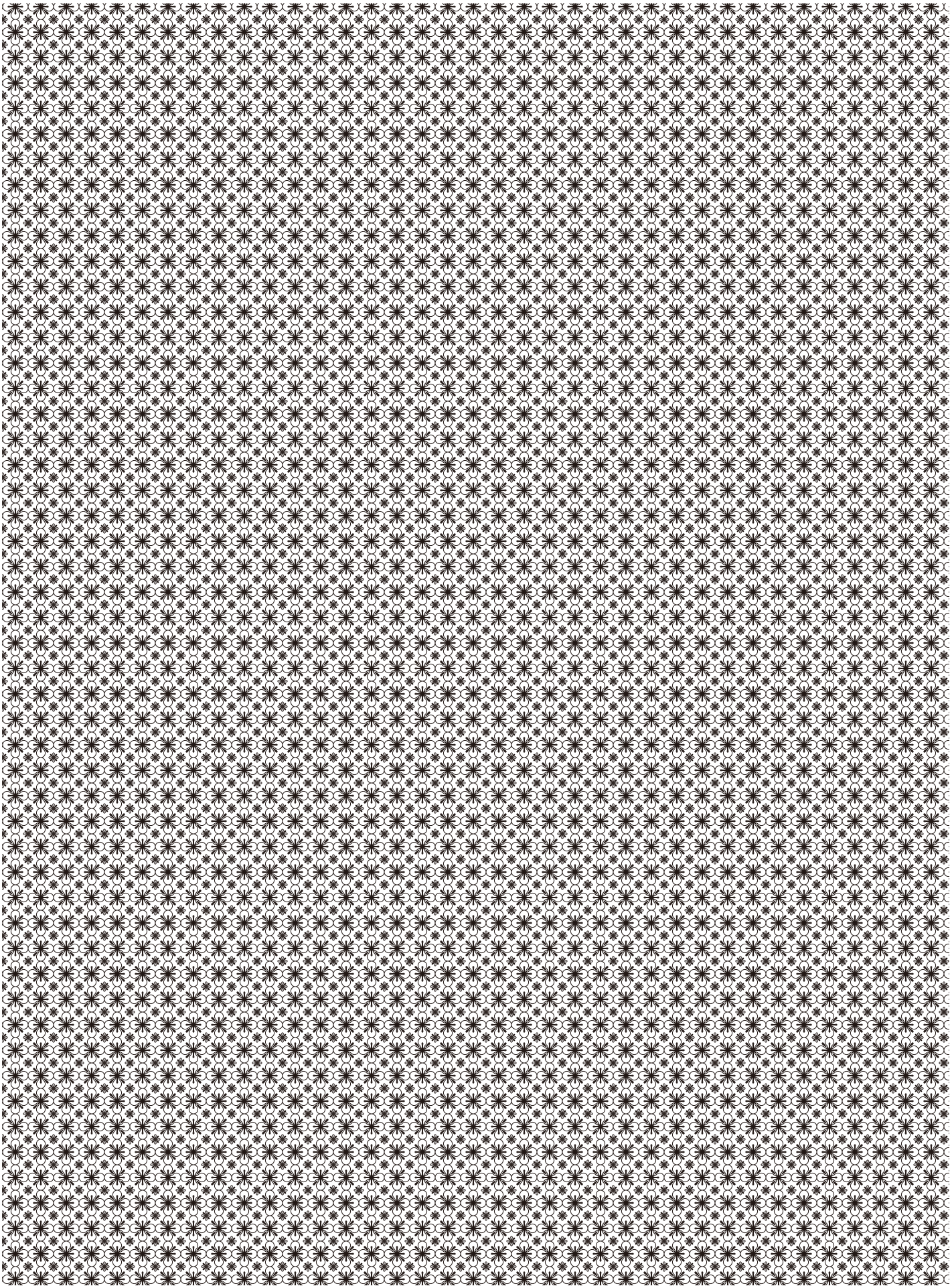
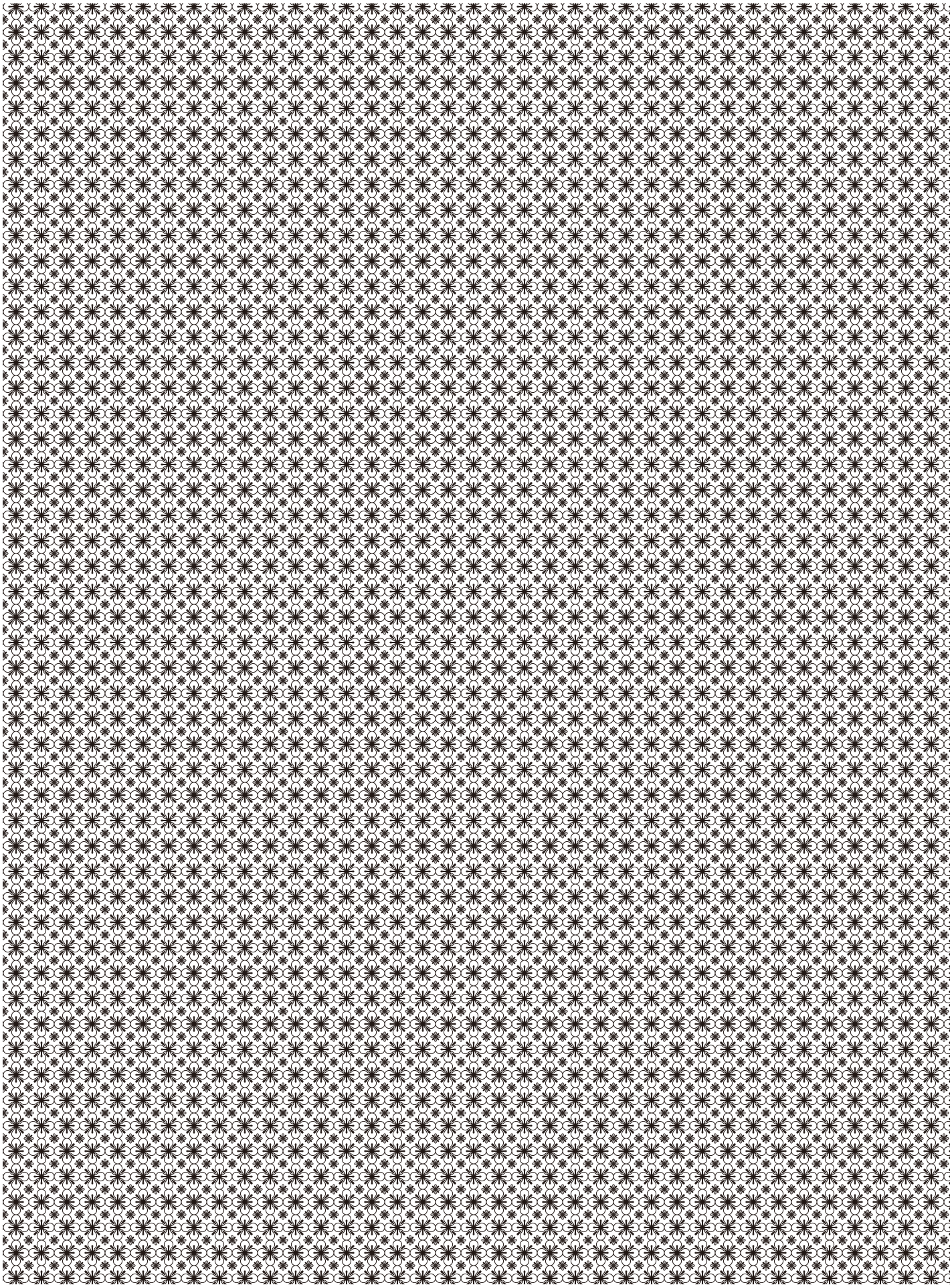
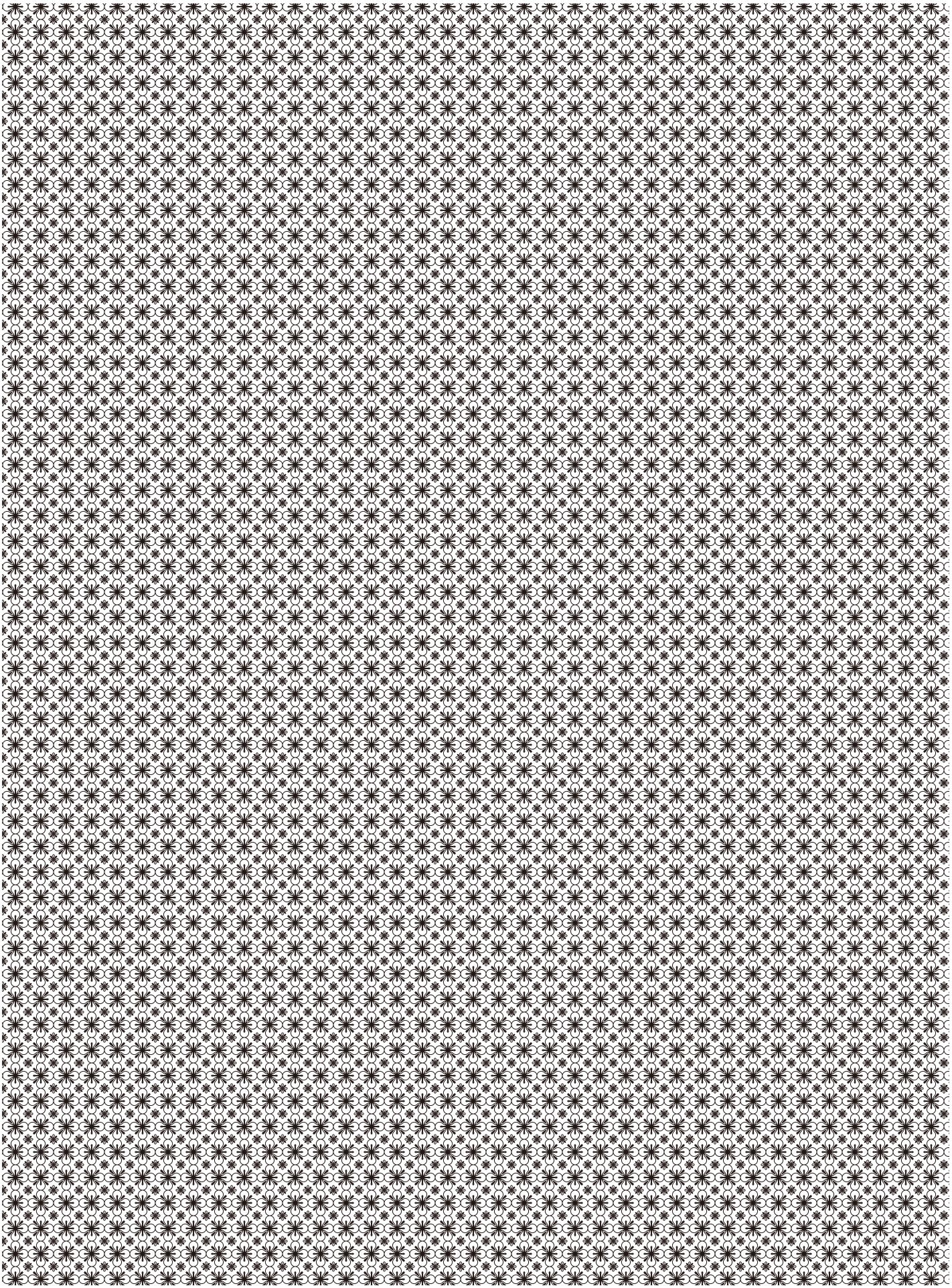
5　キリスト教では、崇高な光に満ちた天上にいる神に向かって高くそびえる教会の中が聖なる場所であるのに対し、神道では、天皇の御陵とその周囲の森の奥の小さな空き地が聖なる場所である。

〔問　15〕本文の趣旨に合う説明として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1　西欧に開始された資本主義は、地球上に拡大し、十九世紀後半には、世界中を一つのシステムに呑みこみ、アジアの多くの国々は、その過程で西欧諸国の植民地にされていった。

2　日本は生き残るために、近代世界システムの一員となる道を選択することによって、植民地化されるのをまぬかれただけでなく、列島の外にまで権益の拡大を求めるにいたった。

3　人間が自然よりも偉いという考え方をもつ近代世界システムを受け入れるということは、人間と自然の中間を重視する日本の伝統を破壊するという矛盾をはらんでいた。

4　西欧の考え方を受け入れ、日本がアジアの「盟主」に躍り出たことに心を動かされた東京市民は、それだけでは満たされず、西欧諸国を超えるためのさらなるプロジェクトを立ち上げた。

5　明治天皇は明治の精神の象徴であり、自分たちの時代のアイデンティティを求める東京市民の力によって創出された深い森に包まれた明治神宮は、新しい日本の伝統の表現場所であった。